
手

暮音孤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手

【Zマーク】

Z8251P

【作者名】

暮音孤

【あらすじ】

祖母の十三回忌に合わせて田舎を訪れた青年は、歳が七つの頃に神隠しに遭っていた。

作中に、富崎県民謡「刈り切り干し唄」を変更したものを記載しています。

「水桶にな、見ん覚えのねえ手が映つちよつたら、決してそんから目を離しちゃーいけんよ」

成人してからも、童には祖母の言葉をふと思い出す時がある。いつも縁側に腰を下ろしていた祖母。何かを見逃すまいとするように景色に目を向ける祖母。幼少を田舎で送った童が見てきた祖母の姿は、年齢を重ねた以上にどこか浮き世離れしていた。そんな祖母から聞いた言葉なのだが、どういう流れで耳にしたのかまでは覚えていない。

そして、一度思い出した言葉は気にしないではいられない。とくに都会に住まいを移し、鏡と関わらない日がないとなると、なおのことである。

童は無意識に虚像を追い、その足元を注視する。それだけだ。しかし、誰と行動していても、それは何も変わらずに祖母の言葉に従っていた。

田舎では昔からの習俗を今も伝えており、たびたび神隠しに遭う人がいては村総出で鳴り物を叩きながら捜してきた。見つかることも見つからないこともあったという。

そんな田舎は数戸の家屋が点々とする、山に挟まれた入り合いで小さな村。秋は紅く黄色く山を化粧し、黄金色に輝く稲穂は太陽の沈む折に至上の世界を覗かせる。

その時間、異世界との境界を曖昧にすることを教わったのも祖母の話からだ。

しかし、祖母の話自体が嘘とも真ともつかない曖昧さを伴い、夢も現も等しく影を伸ばしていたことに気が付いたのは、日がな一日中、縁側に座り、じいっと外を眺める祖母の姿を目の当たりにして

からだ。

祖母の法事も十三回忌を迎えて、親に連れられて帰省していた童も一人で訪れるようになっていた。

当時からそのままの姿を残す畦道を歩いて、祖母の暮らした家に向かう。車も通ることの出来ない細い道を、一人で歩く。

神の居る地に続くとされる道は、昔から決まった時間しか歩かなかつた。格別に心の躍る頃合いには、決まって祖母の言葉を思い出して足を向けなかつた。いや、向けられなかつた。

「雨ん上がりの、稲穂の頭から雫が垂れんつて時はあな、いけんよー」

とくに、神隠しに遭うと言われる黄昏時。童はツンツンと収穫の時を待つばかりの穂に触れながら、昔に遭遇したことを思い出した。

……

まだ、あれは七才の頃 黄金色に輝く稲穂を手にして、同じようすに雨上がりの畦道を歩いていた。道のあちこちにできた水溜まりを踏んで回る。稲穂だけを水面に映し、ギヤマンを踏む要領でぱちぱち撥ねさせる。

瞬きをする僅かな間だけ、飛び散る水玉に黄金色が残り、それが綺麗だつた。夕陽に照らされるだけでも言葉をなくしてしまうが、それ以上のものがあつた。

それがある時、水溜まりに穂先を差し出そうとするとき、風が吹いて淵をはみ出してしまつた。何度も何度も繰り返すが、やはり風が吹く。いよいよ熱くなつて実をたんと詰めた穂殻を掴んで水溜まりに映したのだが。視界の端で白く映える物がよぎつた。

今度は好奇心から、それを追つていた。水面ぎりぎりに腰を屈み、隅々まで田をやつた。そして、見たのだ。その端を渡る白いもの白い手を。雪のように白い手が水面に映つていた。驚いて後ろを

振り返るも、誰もいない。あまりに不思議で、じっと見ていろと、

水面の穂を掴んで引っ張ってきた。

「ぐいぐい、ぐいぐいと引っ張った。

「いやだ、いやだ。これは僕の稻穂だい
ぐいぐい、ぐいぐいと引っ張られ、稻穂はそよぐ。

この時、白い手は風の手なのだ、と幼いながらに考えた。

その綱引きは唐突に終わりを迎えた。

穂から一粒の実が水溜まりに落ちるや、水面を波紋が走り、搖らぎと共に白い手はかき消え、再び元の静寂を取り戻したのだ。
辺りを見渡せば黄昏も過ぎていた。ぬかるむ畦道を急ぎ帰り、祖母にその出来事を話すと……。

「良かった。良かった。お前さは強い子じゃねえ」

祖母は話しても聞こうとしない親とは違い、誉めてくれた。

「そんは山の神だあ。お前さがきんきらに輝く稻穂をもつとつたらな、羨ましくなつたんだあな。山の神はどんと山に座つちよつてよ、村の祭りの時に、今年とれた物をば捧げちよんだが、時たまちよこひよこ山を下りるんだよ。もしも、お前さがひ弱な子でつたら、お前さ」と神のところに行つとゆうてなあ

「神のところ、つてどー?..」

「神のこらす場所だあ。山の、山とは違つ場所に住んでるんよ、
神はなあ」

「水溜まりの向こう?..」

「もつともつと、ひんろい所だあ。あと、水ん溜まりに屈み込んでつてえ、危ねかったなあ。かがみに覗き込んだじょつたらあな、連れてかれたでえね」

祖母はそう話してくれた後、民謡にも似た歌をくちずさんだ。

もはや 日暮れじや 迫々(せいかい) かげる田へ童よい
ぬるぞ 隠せぬうち田

耳にしたことのある歌に、童もついて真似た。

こがね 重たし 実り揺れる田へ秋もすんだよ 田の畦道を田

……

「 高い山から 握り飯こかしゃ 日ノ天狗喜ぶ わしゃひもじ日」
気が付けば、陽は西の地に沈みかけていた。道は見えなくなりかけており、やけに白く映える物が視界の端をかすめた。

驚くと同時に、怯える童に諭す祖母の姿を思い出し、水桶の話も思い出した。ちょうど先の若干曲がつた人差し指を童に立てる祖母は皺を深めて、怯える童を宥めようと皿尻を下げていた。

「水桶はもののたとえだなあ、有り得ねえ物を見いたら、きいつけろお、言つてじだあな」

その白いものはいつだかに見た手を彷彿させ、見覚えのない腕へと続いていた。

「何だあ、誰かいるのに手にしか気が付かなかつただけか。あんまりに白いからあ」と口に出す。内心は形容できない程に慌てていた。そして、手から田を反らしてしまった。その瞬間だった。

畦道が神の居る地へ続く道であるといつことも、祖母が縁側で待つことも失念するほどに慌て、しんと静まりかかる周りを気にする余裕も無かつた。

田の前に顔を覆つよつて手が開かれ、童は田をしばたたくのみ。

その晩、童の隠れた事を知った村人は総出で捜した。組を作つて、お互いを確認しながら、隠された童を捜した。そうでも見つからないことも……。

水桶に覚えのない手が映つたら、決して田を離してはならない。離した途端、連れ込まれ、神に隠されてしまうからだ。

三

を四

ひもじ四

リリの山の めかしそ すんだヨ／明日はたんぼで 稲刈るかヨ
わせの山の めかしそ すまぬヨ／稻の刈り入れ まだまだ先ヨ
もはや 日暮れじや 迫々 (せいかい) かげる四／童よ いねる
ぞ 隠せぬうち四

こがね 重たし 実り揺れる四／秋もすんだよ 田の畦道くわみちを四
屋根は萱かやぶき 萱壁なれど四／昔ながらの 千木ちぎを置く四
歌でやらかせ 草刈り稻刈りを四／仕事苦にすりや 日が長い四
高い山から 握り飯こかしゃ四／天狗喜ぶ わしゃひもじ四

祖母のうたいは続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8251p/>

手

2011年1月3日20時03分発行